

IGFA & JGFAルール

Question & Answer

はじめに
 基本的にIGFAルールは記載のとおりだが、もともとIGFAルールはビッグゲーム・トロリングを母体にしてできあがったルールであるがゆえに、その他のジャンルの釣りにあてはめてみた場合、なかなか解釈しづらい面もある。また記載そのものが多岐にわたっているため、つい見落とされたり、誤って解釈されている場合も多く見受けられる。そこでこのコーナーではIGFAルールで釣りをする上で、また、世界記録、日本記録を申請する上で、間違えられやすい点、難解と思われる点などについて、Q&A(質疑応答)形式でまとめてみた。

項目：釣具（タックル）

アシストフック

メタルジグのフック配列で、俗にいうアシストフックはIGFAルール上、OKですか？

〈回答〉アシストフック(釣り人の間での通称で正式な英語ではないため、欧米では通じません)がIGFAルール上、OKとなりました。(2004年9月1日以降釣ったものから)

メタルジグのフックについて、IGFAルールが変わりました。近年、メタルジグにアシストフック(仮の名称)を使うアングラーがたいへん多くなり、IGFAルール上、どこまでOKなのかという問い合わせがひんぱんに来るようになりました。それと同時に、IGFAルールでは、アイに取り付けるリーダーの長さは、従来、アイから15cm以内とされていたため、何とかもっと長いリーダーを使えるようにしてほしいという要望も多く寄せられていました。

さて、IGFAルールのフックについての大原則は、「魚が餌を見つけて食らいついたときにハリガカリすることが(漁ではない)釣りとしての一般的な概念であり食らいつく前にハリガカリすることを故意に狙ったフック配列はフェアな釣りの精神からは、認められない。したがって、ルアーであれ、エサ釣りであれ、フックはルアーやエサに密着しているか、その中に埋め込まれていなければならない」とされ、これがIGFAルールに共通したフックの取り付け方の基準にされてきました。

このことから、アシストフックのようにジグ本体からハリが離れるのはIGFAルール上、不可とされてきたわけです。そのため、IGFAルール上認められるラインアイからのリーダーの長さは、15cm以内というのが従来の見解だったことは皆さんご存じのことと思います。

そこで、昨年秋、JGFAは会長名にてIGFAに対し、

- リーダーが15cm以上でもほとんどが魚の口にハリガカリし、ファールフッキングする頻度は少ないこと。
 - テールのフックをはずし、ラインアイからフックを出すことによって、根ガカリが格段に防げ、環境にも配慮したフックの取り付け方であること。
- の2点を特に強調し、フック取り付けのためにリーダーを長くしてもIGFAルールの精神(フェアな釣り)に反しないことを主張、メタルジグのフック取り付けに関しリーダーの長さの基準を再考するよう求めました。

IGFAでは、この要望を受けて検討し、JGFAの主張をこのたび全面的に受け入れると連絡が入りました。したがって、2004年9月1日以降釣ったものからは、メタルジグのフック配列は下記のようなものもIGFAルール上、OKとなりますのでお知らせいたします。

1. フックを、メタルジグの両端に付けることは許される。

①ジグのラインアイにリーダーを付けた場合のリーダーの長さは、ジグ本体の長さまでOKとする。

②上のハリを付けて、さらに下のハリを付けることもOKだが、その場合、上のハリのリーダーの長さは、下のハリと重ならない範囲で使用できる。

③ジグの下部にもフックを付ける際は、フックの長さまでのリーダーを使うことができる。(イラスト ABC)

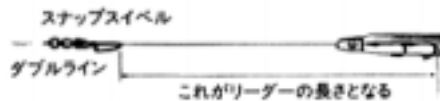
2. テールのフックをはずし、メタルジグ上部のラインアイからシングルフックを2本出すことも許される。

リーダーの長さはジグ本体の長さを越えないこと。(イラスト D)



スカート付きリーダーの長さ

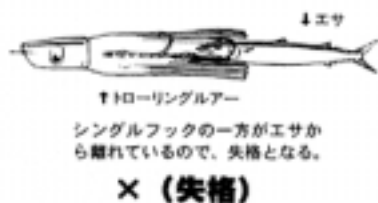
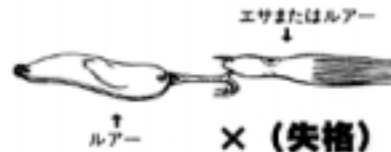
スカート付きのトローリングルアーの場合、リーダーの長さはどこからどこまで測るのか？
〈回答〉イラストを見てほしい。



リーダーの長さは、フックがスカートの内側にあっても、はみ出しているでもフックの末端まで測ればよい。(ただし後部フックの全部がスカートからはみ出さずと失格)。要は、スナップスイベルとリーダーの取り付け点から後部フックの末端までがリーダーの長さとなる。よってイラストのように、フックがスカートの内側に入っている場合は、スカートの末端まで測る必要はない。

ルアーのフックに別のルアーやエサをつけられる？

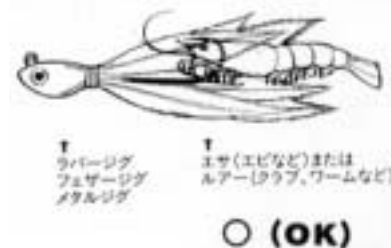
1.ルアーのトレブルフックに、ソフトプラスチック製のルアーがエサを付けて使ってもよいのか？
〈回答〉基本的に「トレブルフックはベイト（生きエサ、死んだエサの両方）に使ってはいけない。」
〔IGFAルールブック日本語訳・G、ベイトフィッシングのフック・1項〕さらに「トレブルフック」は、専用に設計されたプラグまたは他の人工ルアーに取り付けるときだけに使用が許可される〔IGFAルールブック日本語訳II、フックおよびルアー・2項〕のであるから、図のような使い方は、失格とされる。



2.トローリング用スカート付ルアーの2本のシングルフックの後ろのハリにエサをつけて引いてもよいのか？

〈回答〉スカート付ルアーのフック配列そのものはOKだが、エサを用いた段階でベイトフィッシングと考えなくてはならず、その場合「シングルフック(1本バリ)を2本まで使用できるが、……エサは両方のフックにしっかり埋め込むか、確実に(2本とも)取り付けなければいけない。」〔IGFAルール日本語訳G、ベイトフィッシングのフック・1項〕に従っていなければならない。

この図の場合、先頭のフックがエサに取り付けられていないので、失格となる。2本ともエサに取り付けられていればOKである。



3.ラバージグやフェザージグ、あるいはルアーのフックをシングルにして、それにエサやソフトプラスチック製のルアーをつけたらどうか？

〈回答〉エサをつけた段階で、ベイトフィッシングのフックのルールに従うことになり、質問のすべてのケースは、OKである。メタルジグのフックをシングルにし、それにルアーやエサをつけても、IGFAルール違反とはならず、使用は許可される。

項目：ベイト（餌）

コマセ

コマセ（寄せ餌）の使用はよいのか？ たとえば、キハダ、カツオ、シラ釣りなどの場合、魚群の足を止めるための（活）イワシ撒きや、マダイ釣り、メジナ釣りのオキアミやイワシなどのコマセの使用に関して。

〈回答〉IGFAルール「釣りの規定」・失格となる行為・第6項に、「哺乳類の肉、血、皮、またはその他の部分をチャミング（寄せ餌）またはベイトとして使用してはいけない」という記載があるが、魚やオキアミなどの寄せ餌はこれらに該当しないのでよいということになる。

ただし、イワシの、ミンチ、オキアミのコマセなどについては、日本の場合、地方自治体の漁業調整規則などに禁止されている場合があり、その場合にはこれに従わなければならない。

フライマテリアルとしての魚皮

IGFAルールにおいて、フライマテリアルとして乾燥させた魚皮を使ってもよいのか？

〈回答〉IGFA本部に確認したところ、「乾燥した魚皮といえども、水に入れればもとどおり”生(ナマ)の魚皮”と同じよくなる」ため、保存したベイトに相当し、IGFAルールでは認められないという回答だった。

したがって、フライマテリアルとしては、いかなる魚皮も使用できないということになる。フライマテリアルのルールについてはIGFAルールブック・日本語版訳のフライフィッシングの規則・F・フライに項を参照のこと。(1997年版では、P-11~12)



項目：釣法

ロッドの手渡し援助

トローリングや沖釣りの時、アタリがあって、ロッド・ホルダー（ロッド・キーパー）からロッドを抜いてファイトする時、ロッドを他の人から渡してもらってもよいのか？

〈回答〉これに関しては、IGFAルール「釣りの規定」・第2項に明言されている。

「ロッド・ホルダーにロッドを立てている時に、魚がベイトまたはルアーにストライクした場合、釣り人はできるだけ速やかにロッドをホルダーからはずし、ファイト姿勢に移らなければならない。この規定の意図は、釣り人がロッドを手を持って自らストライクし、そしてフックにかけることにある。」

つまり、「ストライクしたあと、ロッドを他の人から手渡してもらった場合は、失格となる。」また、ロッド・ホルダーやロッド・キーパーにロッドをセットしたままファイトを続けることも失格となるので注意すべきだ。

これらは、まますることなので、とくに気をつけていただきたい。

項目：検量

ハカリ



オカッパリで釣って、記録を申請したいが、検量にはどんなハカリを使ったらよいのか？

〈回答〉記録申請はしたい、しかもリリースもしたい。というオカッパリアングラーの悩みは、現地に持っていきべきハカリ。持ち運びに便利でしかも正確なものとなるとなかなかやっかいです。最近、棒状のつる巻きバネハカリを使う人が多いのですが、正確さにいまち欠けるのと、せっかく重さをはかっている写真を撮っても、目盛りが小さくボケてしまったり、まるで写らなかったりして、審査も難航することがしばしばです。そこでお勧めなのは、ポータブルのデジタルハカリ。0.05kg単位で50kgまではかれるスグレモノです。電源は付属している9Vのアルカリ電池でOKです。**（ただし防水性はありませんのでご注意ください。）**

その他の仕様：寸法（WIID）…90×125×30mm／重量：約295g ・便利な1m巻尺付き

標準価格：12,000円（税別）

●製品の問合せ先：JGFA事務局（JGFA事務局では販売いたしません、取り扱い店をご紹介します。）

●1年ごとの精度確認：JGFA事務局でもお受けします。

項目：記録申請（部門）／記録申請（世界記録申請）

ラインクラス部門対象魚以外の魚の申請

JGFAラインクラス部門の記録対象魚でない魚を釣ったが、記録申請できるのか？

〈回答〉現時点でラインクラス部門の日本記録認定対象魚となっていない魚種でもオールタックル部門や参考記録として記録申請できる。その場合の審査は、IGFAルールの規定に沿って行われるが、参考記録の場合、その魚の申請人数が部門ごとに別々の個人として10人を越えるまでは、参考記録として保存される。すなわち、申請人数が部門ごとに別々の個人として10人を越えた時点で、日本記録対象魚として考慮される。

ただし、ラインクラス部門の対象魚の最終決定は、ルール委員会での検討事項となった。

オールタックル部門の対象魚

オールタックル部門には、どんな魚種でも申請できるというのがほんとうか？

〈回答〉オールタックル部門では、正式な学名を持っている魚種であって、60kg（130Lb.）以下のラインで、IGFAルールに基づいて釣られた魚ならば、どんな魚でも申請できることになっている。ただし、目安は、その魚種の最大到達重量と思われる重さの1/2以上であることが望ましい。

淡水部門の魚を海で釣ったら？

淡水部門の魚を海で釣っても、やはり淡水部門としての申請や登録になるのか？

〈回答〉IGFAルール・世界記録の部門「淡水魚」の項に明記されている。淡水部門に記録されている魚は、海または汽水で釣ったものも世界記録として認められる。ただし、釣り具および釣り方は淡水のルールに基づいたものでなければいけない。

とくに、淡水のルールの中で海水のそれと違う点は、ダブルラインおよびリーダーの長さに関する規定であり、十分に注意する必要がある。（IGFAルールの「淡水のダブルラインおよびリーダーの規定」参照のこと。）

項目：記録申請書（対象魚）

放流魚（養殖魚）

淡水魚のマス類のように成魚放流されたと思われるものを釣った場合、記録として申請できるのか？

〈回答〉たしかに、日本の淡水域の湖沼河川には、成魚放流されたマス類が多く、大物も混じっており、放流後ただちに釣られ、記録申請される可能性が非常に高い。

JGFAでは、記録対象魚として、養殖され放流直後と思われる魚に関しては、IGFAルールの精神から、それらを認めるわけにはいかない。しかし、その魚体が十分に野性を回復し、鱗の欠損がなく、体色その他も天然の魚と区別がつけなくなったものに関しては、記録の対象として認めている。

もちろんJGFAの審査委員会では、放流が頻繁に行われている水域からの申請魚については、もし、その魚の野性度が写真だけでは判断しづらい場合は不完全とする場合もあるので、そのためにも、すべての鱗に欠損のないことを証明できるように、各鱗（左右の胸鱗、背鱗、腹鱗、尾鱗）をそれぞれ欠損がないことがわかるように広げた上で写真をクローズアップして鮮明に撮り、それらの写真を、その他の申請に必要な写真とともに、申請書に添えて提出されることを奨励する。

項目：記録申請

申請ラインクラス

たとえば8kg（16Lb.）表示のラインで釣って、その上のクラスや下のクラスに申請してもよいのか？

〈回答〉原則として、釣り人が表示ライン・クラスを意図的に上のクラスとしたりしたのクラスとすること、また、提出したラインを異なったライン・クラスとして申請することを認めない。たとえば、IGFAもしくはJGFA審査委員会では、記録申請の際のライン提出があった場合、そのライン・クラスを実際に申請ライン・クラスでブレイク・テストを行い、もし、ラインが要求されたライン・クラスをオーバー・テストした場合については、次の上位のラインクラスとして再審査する。ただし、もし、テストの結果、申請ライン・クラスより低い場合には、申請部門の下のクラスにはならない。結果、質問の8kgテストラインの申請の場合、

- 1.表示どおりの8kgで受けつける。意図的に上、もしくは下のライン・クラスとして申請することはできない。
- 2.8kgテストのラインとしてブレイク・テストを行い、もし8kg以上で切れた場合、10kgクラスの部門として再審査する。
- 3.もし、ブレイク・テストで、6kg以下で切れたとしても、6kgクラス・ライン以下の部門とはしない。